

時代が動き始めたか 大相撲
～新年早々相撲三昧～

照ノ富士の負け越しと琴奨菊の大関からの陥落は予想していたので驚きもしなかったが、鶴竜・日馬富士・豪栄道の途中休場は予想外の出来事だった。

上位陣が一人落ち、二人落ちするにつれて白鵬の顔色が変わっていったのがよくわかった。

その中で淡々と自分のペースで相撲をとっていた稀勢の里が賜杯を手にした。14日目に優勝が決まりはしたが、千秋楽結びの一番はかなり見応えのある熱戦だった。観戦する立場から言うと、面白いしかもスリル満点の場所だった。結果として稀勢の里の横綱昇進が決まった記念すべき場所ともなった。

また、次の時代を担うと思われる新しい力が見えてきたという点も合わせると、この場所でひとつ時代が動いたような感じがした。

今場所目立った動きをした力士に焦点をあてて、15日間を振り返って見る。

その1 稀勢の里初優勝

稀勢の里の前半の相撲は落ち着いて取っていることと、やや腰高ではあるが腰を前へ前へと押し出すような相撲を取っているのがよく見えた。左の固いおっつけと右の絞りで相手を浮き上がらせる形が取れていて、良い流れが漂っていた。しかし中盤から後半になってくるに従って、重心が上に上がり、右を抱え込むような姿勢が目立ち、結果として右上手を取っても「深い位置」を「上から取る」という欠点が目立ってきた。



攻め込まれてもやたらに驚かず、落ち着いて忍ぶことで切り抜けている感じがしたが危ない橋がいくつもあった。これまでの場所とは違っていたのは、この「攻め込まれても慌てふためかない」という点に尽きるかもしれない。周囲の力士の不調や脱落にも助けられた感否めないところではあるが、自身の「相撲」と「相撲を取る心構え」が向上したのかもしれない。

(左画像：左のおっつけで相手を浮き上がらせる攻め 右画像：右を抱え込んで苦況にさらされる場面)
相撲ファンやマスコミは横綱、横綱と騒ぎ立てるが、仮に横綱に昇進したとしても「これまで大変だった」ことよりも「これからの方が遙かに大変」であることを肝に銘じなければならない。長所である左の強いおっつけを活かしつつ、今場所前半で見せた腰の構えを継続し、欠点である右の使い方を「前みつ狙い」に切り替えるなどして、「強い横綱」を目指してもらいたいと思う。



その2 輝く新関脇 玉鷲

ここ数場所で大変身を遂げた力士の一人に数えられる。これまでも鋭い突き押しは定評があったが、なかなか思い通りに突き押しをさせて貰えなかった。ところが、立ち合いの位置と腰の構えを変えることで鋭い立ち合いの踏み込みが可能になり、さらに長い腕を伸ばした突きが功を奏するようになってきた。一方の腕を長く伸ばして突いている間に腰が前に移動して次の腕が伸びてくる、これを繰り返されたら相手は何もできなくなってしまう。

H28年7月(東12枚目)	H28年9月(西6枚目)	H28年11月(西小结)	今場所(東関脇)
9勝6敗	10勝5敗	10勝5敗	9勝6敗

連続四場所勝ち越しを続けているが、この先まだ急に衰えることはなさそうなので、しばらくはそれなりの星を挙げて行けそうな感じがする。上位陣にとって気の抜けない力士の一人になるだろう。

快進撃を続ける玉鷲の相撲を見て NHK の中継アナウンサーが「今場所 10 勝したら来場所には大関問題も

出てくるのではないかと語り、解説者に「まだそういう論議は早すぎる。三役定着が始まったばかり」とたしなめられる場面があった。最近アナウンサーの（マスコミの？）先走りが多い。

その3 御嶽海は技能賞

平成27年11月場所に新入幕、前頭筆頭まで躍進したところで跳ね返されたが、西5枚目から再び上位に挑戦。平成28年11月場所には新小結となったが、ここでも跳ね返されて、今場所は西前頭筆頭に下がった。



膝が曲がり腰が下りた鋭い立ち合い、前傾姿勢を保ちながらの前進、強い押つけとはず押し、のど輪を交えた力強い突き押しとそれを支える前進圧力。さらに時には低い位置から前みつを引いての寄り身もある。跳ね返されてはいたが、毎場所確実に力を付けて来ている。

今場所はこれまでの学習の成果が出たような素晴らしい相撲が続き、二横綱二大関を撃沈して11勝4敗の成績に技能賞という花も添えた。

（左画像：初日豪栄道を破る この腰の構えに注目）

けれん味のない正直な教科書通りの相撲で、見ていても爽快さが感じられる。

勝負に挑む強い意志が感じられる鋭い眼光は、松鳳山と双璧。今後も上位陣を苦しめる活躍を続けてくれると想像できる期待の若手である。

H28-5月（西8枚目）	H28-7月（東筆頭）	H28-9月（西5枚目）	H28-11月（東小結）	今場所（西筆頭）
11勝4敗	5勝10敗	10勝5敗	6勝9敗	11勝4敗

その4 尻に火がついたか 貴ノ岩

181cm・148Kgという立派な体格、太い大腿部ときちんと割れる腰、三年前に新入幕を果たした時には大器を感じさせた。しかしその相撲っぷりにはムラがあり、良い相撲が15日間続かず、良い成績が二場所続かないという残念な力士だった。ところが、今年の7月場所・9月場所あたりから相撲に変化が出てきた。

これまで相手の陣地で相撲を取ることは少なく、下がりながら勝機をうかがう消極的な相撲だったが、立ち合いの踏み込みを低く強くし、前に出ながら攻め手を休めない取り口に変り星数が上がるようになってきた。もとよりこれだけの体がある力士、こういう取り口をされたら相手は手が出せない。東前頭10枚目で11勝4敗、白鵬を一気の寄り身で下した星を含めて高い評価を得て殊勲賞を獲得。弟弟子貴景勝（旧名：佐藤）の入幕で尻に火が付いたのかもしれないが、この相撲が更に続いて行けば三役定着も夢ではない。

H28-5月（東6枚目）	H28-7月（東10枚目）	H28-9月（東3枚目）	H28-11月（西7枚目）	今場所（東10枚目）
5勝10敗	12勝3敗	5勝10敗	6勝9敗	11勝4敗

その5 勢の勢い

昨年5月に関脇の座を手にする事が出来たが、怪我もあり大きく跳ね返された。その後、回復に手間取り負け越しが続いたが運良く大きく後退することはなかった。右四つの形が出来上がっている力士ゆえ、右差しにこだわりすぎて下手からの攻めを得意とし、相手に攻められてから下手で反撃するという場面が多く、これが怪我の元にもなった。怪我を機会に、前進を基調とした攻めの相撲に変わったことで持てる力が発揮できるようになった。足腰の構えがしっかりしていて、前さばきが良いというベースが出来ている力士なので、投げにこだわらず前に進みながら臨機応変の攻めを展開していくことで星数はついてくる。今場所は8勝止まりとなりはしたが、明らかに復調と相撲の変化を感じさせる15日間だった。戦国時代と化した前頭上位で今後の活躍が大いに期待できるし、おまけに来場所はご当所相撲になる。

H28-5月（西関脇）	H28-7月（西4枚目）	H28-9月（西7枚目）	H28-11月（西8枚目）	今場所（西3枚目）
4勝11敗	5勝10敗	7勝8敗	10勝5敗	8勝7敗

その6 強さが欲しい高安

大勝ち・負け越し・大勝ち・負け越しを繰り返してきたが、昨年5月場所西5枚目で9勝6敗をきっかけに勝ちが持続するようになってきた。11月場所で「大関取り」と騒ぎ立てられて本人もその気になってしまい墓穴を掘る結果となったが過去の流れを見る限り、私の目で見れば「大関取り」などという言葉はまだ早い状態だった。案の定の結末で、10勝以上を上げることは出来なかったばかりか7勝8敗という惨敗に終わった。

近頃、小結・関脇で10勝以上を二場所でも上げればすぐさま「大関取り」と騒ぎ立てるおかしなやりがある。冷静にその人の相撲と成績を眺めればわかりそうなものなのに、マスコミはおろかマスコミに踊らされた協会幹部までが神輿を担ぎ出す。白鵬曰く「大関は選ばれた人の地位、そこから横綱になるのは運命の力」。さて今場所の高安は、前半戦では不戦勝を含めて5勝3敗と目立った存在ではなかった。ところが9日目に白鵬を破ってから勢いがつき、後半戦では1敗しかせず11勝4敗を上げ敢闘賞を手にした。

これまで上位力士を相手に様々な動きの結果勝ちを取めるが、下位の力士に他愛なく負けることが多かった。高安の相撲には器用さはあるが、「強さ」がない。星数だけでは判断できない部分がこれからの課題であろう。

H28-5月(西5枚目)	H28-7月(西小結)	H28-9月(東関脇)	H28-11月(東関脇)	今場所(東小結)
9勝6敗	11勝4敗	10勝5敗	7勝8敗	11勝4敗

その7 技能派継承 蒼国来

前頭中位から上位への脱皮を図っている状況にある蒼国来の今場所の相撲はひとときわ光り輝いていた。立ち合いの素早い前みつ取り、浅い位置にまわしを引いての食い下がり、機を見て繰り出す出し投げや足技。早い相撲によし、長い相撲でもよし、身についた基本技がいきいきとしていた。技能派力士としては妙義龍・遠藤と並ぶ貴重な存在である。西前頭10枚目で横綱・大関とは対戦しない地位ではあるが、何人かの好調力士を破っての12勝3敗で技能賞に輝いた。「うーん、上手い!」と思わず声を発したくなるような勝負が何番もあった。上位に進出してもやっていける力を着々と身につけてきているように見えた場所だった。こういう味のある力士の存在が相撲を面白くしてくれる。技能賞の常連になってもらいたい存在である。

その8 ついでにひとこと

遠藤は先場所千秋楽に負け越し決定という気の毒な結果に終わり、三賞も逃した。今場所はどこまで復調できたか注目してみた。勝った相撲については遠藤らしい腰の決まった厳しい相撲で復調を感じさせたが、負けた相撲ではまだまだ回復には至っていないという印象を強くした。西前頭4枚目という絶好のポジションではあったが、白星と黒星が交錯した結果、千秋楽に高安に敗れて今場所も7勝8敗に終わった。

幕内では、最年長の豪風が東5枚目で10勝5敗と好成績を上げたが、大怪我で西十両7枚目に落ちた安美錦はまだ痛々しい土俵で5勝しか上げられなかった。この地位での5勝10敗は、何とか来場所も十両に止まることができると思うが、おそらく残り二枚程度しかない地位になってしまうと思われる。何とか復調と復活を念じたい。

サポーターやテーピングを一切しない力士として、遠藤ほか何人かの力士がしばしば話題になる。昔は「自分の弱いところがどこか?」を相手力士に示すようなものだと言って、サポーターをすることに否定的な力士も少なくなかった。近頃はサポーターの他にテーピングが登場するようになり、中には「相撲の持つ美しさ」の妨げになるような過剰なテーピングも見受けられる。体に異常があってテーピングをしているだけなら「不可抗力」として許せるが、中には自らの技の為にしているテーピングも存在する。四つ相撲の力士が「まわしを取りやすくするために小指と薬指を絆創膏で巻き付ける」という話を本で読んだことがある。また突き押しを武器とする力士の中には、その効果を高めるために複数の指をテープで止める人もいる。突き押し相撲に威力を発揮する琴勇輝の手を見て驚いた。左右の手の指はテープでぎっちり固められていて、

まるでボクシング選手がグローブを付ける前の状態に近い。見方によっては、チンピラの喧嘩の前の準備のような状態で、いささか常軌を逸しているように感じる。昨年 11 月場所 14 日目、琴勇輝の張り手を喰らった英乃海が脳震盪で転倒して起き上がることができなくなる場面があった。

「怪我等など正当な理由のないテーピング」を禁止するルールの新設が必要ではないかを感じる。



(左画像：琴勇輝　上画像：琴勇輝の手のテーピング)

以上